Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2006, Vol. 53, 65 − 74.

マターナル・アタッチメント研究の概観

佐　藤　里　織[1)]

1970年代前半にマターナル・アタッチメント研究が始まりすでに35年が経過した。この間のマターナル・アタッチメント研究を概観すると，(a)マターナル・アタッチメントの発達に関するもの，(b)母子関係に関するもの，(c)子どもの発達に関するものの３つの観点について未検討のまま残されている問題がある。本論文では，これらの問題点がどのように導き出されたのか，さらにそこから提起される今後の課題について指摘した。

ところで一人の女性から母親へと変化すること，すなわち母親の発達は，子どもが生まれてから始まるのではなく，妊娠期における胎児に対する感情の芽生えからすでに始まっていると考える。妊娠期に始まる母親の胎児に対する感情は妊娠経過に伴い発達し，出産後の母子関係や，子どもの発達に影響を及ぼすと考えられる。このような母親の感情は，一般にマターナル・アタッチメントと呼ばれる。本論文では，マターナル・アタッチメントをとおして母親の発達について検討するために，35年間にわたるマターナル・アタッチメント研究を概観した。

マターナル・アタッチメント研究は，研究内容や手法によって1970年代，1980年代の２期に大きく分けられる(Cranley, 1993)。1970年代は，出産直後のマターナル・アタッチメントがその後の母子関係や子どもの発達に決定的なものとなるという見解が優位であり，そこでは母親の行動，例えば，愛撫する，キスする，抱きしめるといった子どもに向けられた行動がマターナル・アタッチメントの指標とされた。1980年代には，マターナル・アタッチメントは妊娠期に始まり，徐々に発達するものであるという見解が優位となった。1980年代は，多くの研究において行動観察ではなく，質問紙によってマターナル・アタッチメントが測定された。論文では1970年代と1980年代のマターナル・アタッチメント研究に，1990年代以降のマターナル・アタッチメント研究を加えて３期ごとにマターナル・アタッチメント研究を整理した。

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

1970年代：マターナル・アタッチメント研究の始まり

1970年代のマターナル・アタッチメント研究は，マターナル・アタッチメントの発達，人間の母子関係における感受期の存在，母親役割の達成におけるマターナル・アタッチメントの重要性について検討したものに分けられる。

マターナル・アタッチメントの発達

マターナル・アタッチメントを発達的な視点から検討した先駆的なものとしてRobson & Moss（1970）の研究がある。彼らは新生児をもつ母親54人に対して生後３ヵ月から生後４ヵ月の時点で回想法による面接調査を行った。そこでは妊娠・出産過程をとおしてマターナル・アタッチメントがどのように芽生え，変化するのか検討された。その結果，マターナル・アタッチメントは子どもが生まれてからすぐに芽生えるわけではなく，母親自らが健康を回復し，新生児を受け入れていくことによって徐々に芽生えることを指摘した。さらに，生後４週間から生後6週間では，母親は子どもを一人の人間として認識するようになり，生後７週間から生後９週間では，子どもが母親に対して他の人間とは違う反応を示すようになることから，母親は子どもが自分を特定の人間として認識できるようになると感じることを報告した。これらの結果は，視線が合う，微笑むなどの日々変化する子どもの反応によってマターナル・アタッチメントが発達することを示唆するものであった。

人間の母子関係における感受期の存在

1970年代最も注目を集めたのは，人間の母子関係における感受期の存在を指摘したKlaus & Kennell（1976 竹内他訳　1979）の研究であった。彼らは，人間にも動物と同じように感受期が存在することを示すことで，出産直後に母と子を分離して子どもを新生児室で集中管理するという当時の産科看護に対して改善の必要性を指摘しようとした。彼らは，出産直後に見られる母親の行動（例えば，愛撫する，キスする，抱きしめるなど）をマ

ターナル・アタッチメントと呼び，出産直後から5年間にわたる追跡調査を行い出産直後のマターナル・アタッチメントが後の母親の養育行動や子どもの発達にとって決定的なものとなることを主張した（Klaus, Kennell, Plumb, & Zuehlke, 1970, Klaus, Jerauld, Kreger, McAlpine, Steffa, & Kennell, 1972 ; Kennell, Jerauld, Wolfe, Chesler, Kreger, McAlpine, Steffa, & Klaus, 1974 ; Rinlgler, Kennell, Jarvella, Navojosky, & Klaus, 1975 ; Ringler, Trause, Klaus, & Kennell, 1978)。この見解は多くの研究者によって支持された（e.g., DeChteau, & Wiberg, 1977a, b ; Hales, Lozoff, Sosa, & Kennell, 1977 ; Carlsson, Fagerberg, Horneman, Hwang, Larsson, Rodholm, Schaller, Danielsson, & Gundewall, 1978, 1979)。以来，マターナル・アタッチメントは母親の養育行動や子どもの発達に重要な意味をもつものとして理解されるようになった。

しかしながら，そこには見過ごされていた点があった。それはKlaus & Kennell（1976　竹内他訳　1979）の一連の研究ではマターナル・アタッチメントが“子どもに対する一方向性をもった関心及び愛情”であり“特異的でかつ長期にわたり持続する関係”と定義されていた点である。マターナル・アタッチメントとは，母と子の相互作用の中で変化するものであり，相互影響性という二者関係の特性をもつものであると考える。母親からの一方向的なものという彼らの理解からは，マターナル・アタッチメントの発達をとらえることはできない。つまり，彼らの一連の研究はマターナル・アタッチメントが発達するという視点を欠いていたのではないかと推測される。

母親役割の達成におけるマターナル・アタッチメントの重要性

妊娠・出産過程における女性の身体的，情緒的変化との関連からもマターナル・アタッチメントは検討された。例えば，Rubin（1975）は，妊娠中に女性が母親になるために達成すべき課題の一つとして，母親と胎児とのきずなの形成をあげた。具体的には，母親が胎児を自分と分離した個人であると気付き，胎児に愛情を覚え，胎児と関わることが母親役割を達成するために必要であると指摘されている。Leifer（1977）は，19人の初産婦に面接と質問紙（Feelings About The Baby : 以下FAB）による調査を行い，妊娠期から生後7ヵ月までの母親の心理的変化と母親役割の受容について検討した。その中では多くの女性が妊娠期に高い不安や情緒的不安定さを引き起こす一方で，成人としての自覚や充実感などを得ることが示された。さらに，妊娠初期のマターナル・アタッチメントが妊娠生活や出産後の育児への適応を予測する要因となり得ることが指摘された。

日本では，高橋（1976）が妊娠5ヵ月から生後4ヵ月までの間に計5回にわたる縦断調査を行い，生後1ヵ月のマターナル・アタッチメントと妊娠期や出産後における母親の心身の状態との関連について検討した。マターナル・アタッチメントの測定には，Robson & Moss（1970）の面接内容及び，対になった7項目の形容詞について“赤ちゃん”という言葉を聞いたときの感じを5段階評定し，その合計得点を用いている。結果，生後1ヵ月においてマターナル・アタッチメントが早期に形成された母親は，マターナル・アタッチメントの形成が遅れた母親よりも妊娠中から出産後に至るまで心身の状態が安定していたことが示された。花沢・飯塚（1978）は，妊娠初期から生後1週間以内の妊婦及び褥婦を対象として文章完成法（Sentence Completion Test: 以下SCT）を用いた横断的な調査を行った。結果，中期から後期にかけて妊婦は胎児に関心を向けるようになり，母親としての自覚が強くなること，後期になるほど妊娠や妊娠に伴う容姿の変化を受容するようになるが，同時に容姿への嫌悪感も強まる傾向があること，さらに後期になるほど分娩を克服しようとする意欲や分娩を待ち望む喜びが強くなることが示された。

これらの研究はそれぞれ対象とした時期は異なるが，共通して妊娠・出産過程における母親役割の達成や母親意識の芽生えにマターナル・アタッチメントが重要となることを指摘するものといえる。

1970年代のまとめ

(a)マターナル・アタッチメントの発達に関する問題　1970年代，マターナル・アタッチメントの発達について検討したものは，唯一，Robson & Moss（1970）の研究であり，その中で初めて分娩直後から生後3ヵ月におけるマターナル・アタッチメントの発達が指摘された。しかし，その結果は回想法によって明らかにされたものであり，マターナル・アタッチメントの発達を縦断研究によって直接的にとらえたものではなかった。したがって，1970年代，厳密にはマターナル・アタッチメントの発達を示すデータはほとんどなかったといえる。

(b)母子関係に関する問題　Klaus & Kennell（1976　竹内他訳　1979）は，生後1ヵ月，生後1年，生後2年における母子関係，つまり母親の養育行動に対する感受期のマターナル・アタッチメントが決定要因となることを主張した。しかし，彼らの研究はマターナル・アタッチメントが発達するという視点からマターナル・アタッ

チメントと養育行動との関連を検討したものではなかった。

(c)子どもの発達に関する問題　Ringler et al. (1978) は，Klaus & Kennell (1976　竹内他訳　1979) の一連の追跡研究の中で，分娩直後に接触時間が延長された母子を5年間追跡した。彼らは5歳児の発話や言語理解力に対して感受期のマターナル・アタッチメントが決定要因となることを主張した。しかし，この中でもマターナル・アタッチメントが発達するという視点から子どもの発達に及ぼす影響力について検討されたわけではなかった。

1980年代：マターナル・アタッチメント研究の移行期

1980年代のマターナル・アタッチメント研究は，マターナル・アタッチメントの先行要因とマターナル・アタッチメントの発達について検討したものに分けられる。マターナル・アタッチメントの発達について検討した研究は，さらに妊娠期のマターナル・アタッチメント，妊娠期から出産後にわたるマターナル・アタッチメント，出産後のマターナル・アタッチメントと焦点を当てた時期によって3つに分けられる。1980年代は1990年代以降に広がるマターナル・アタッチメント研究が芽生えはじめ，マターナル・アタッチメント研究の移行期といえる時期であった。

マターナル・アタッチメントの先行要因

女性が母親役割を達成するためにマターナル・アタッチメントが重要となるというRubin (1975) やLeifer (1977) の指摘を受け，妊娠期のマターナル・アタッチメントが注目され始めた。そこでは，従来のように行動観察ではなく質問紙を用いてマターナル・アタッチメントが測定された。代表的なものとしてCranley (1981) の研究がある。Cranley (1981) は，妊娠期におけるマターナル・アタッチメント尺度 (Maternal Fetal Attachment Scale：以下MFAS) を作成し，妊娠35週から妊娠40週の妊婦71人を対象として，マターナル・アタッチメントとソーシャルサポート及び妊娠中のストレスとの関連を検討した。その結果，妊娠中ソーシャルサポートが得られている人やストレスの低い人ほどマターナル・アタッチメントが強いことが示された。他にも，MFASを用いて多くの研究者がハイリスク妊娠，実母との関係，結婚の満足度，計画的な妊娠，不安，妊娠中の検査などとマターナル・アタッチメントとの関連を検討した (Curry, 1987 ; Kemp & Page, 1987 ; Weaver & Cranley, 1983 ; Cranley, 1984 ; Mercer, Ferketich, May, DeJoseph, & Sollid, 1988)。これらの要因の中で，結婚の満足度は，マターナル・アタッチメントを促進させる効果があること，ハイリスク妊娠は，マターナル・アタッチメントに影響力をもたないことが一貫して示されていた。

マターナル・アタッチメントの発達

1980年代は，MFASをはじめとした質問紙を用いたマターナル・アタッチメントの測定が主流となり，多時点にわたる調査から妊娠期のマターナル・アタッチメントの発達が検討された。多くの研究者はマターナル・アタッチメントの発達をとおして妊娠・出産過程における母親の発達をとらえようとした。そこではマターナル・アタッチメントは中期以降，胎動を契機として強くなることが数量的な分析により示された (Reading, Cox, Sledmere, & Campbell, 1984 ; Condon, 1985 ; LoBiondo-Wood, 1985 ; Vito, 1986 ; Heidrich & Cranley, 1989 ; Grace, 1989)。例えば，Grace (1989) は，69人の女性を対象に妊娠期に5時点にわたり調査を行い，マターナル・アタッチメント得点が妊娠の進行に伴い上昇することを示した。

日本では妊娠期のマターナル・アタッチメントについて，川井・庄司・恒次・二木 (1983) が，SCTを用いて母親の胎児への認知や感情の特徴及び変化を検討した。調査内容は“妊娠して，私のかわったことは”“おなかの赤ちゃんが動くと”“私はおなかの赤ちゃんに対して”などの刺激文の続きとなる文章を完成させるもので，妊娠初期から後期までの妊婦を対象に実施された。彼らは，数量的に示された研究と同様，マターナル・アタッチメントが中期以降強くなり，妊娠経過とともに変化することを指摘した。

妊娠期と出産後のマターナル・アタッチメントについて，川井他 (1986) は妊娠期に引き続き，新生児期用のSCTを用いて出産後数日の母親を対象に調査を実施した。新生児期用のSCTは“赤ちゃんが生まれて，私のかわったことは”“赤ちゃんが泣くと”“赤ちゃんといると私は”などの刺激文よって構成されている。妊娠期SCTと新生児期SCTの反応はポジティブとネガティブに分類され，妊娠期と出産後の母親の反応が比較された。その結果，妊娠期より出産後の方がポジティブ反応は多く，ネガティブ反応が少ないことが示された。彼らは妊娠期と出産後の違いについて，出産後数日は親和的な情緒昂揚期であること，さらに出産後は乳児との現実的な関わりによってポジティブな反応が多くなることを指摘した。これらの指摘は，妊娠期と出産後のマターナル・アタッチメントが質的に異なることを示唆するもの

といえる。

Reading et al.（1984）は，初妊婦129人を対象に妊娠16週，妊娠32週，分娩後24時間以内，生後3ヵ月と計4回にわたる縦断研究を行った。そこでは妊娠32週のマターナル・アタッチメントが分娩後24時間以内のマターナル・アタッチメントに対して影響力をもち，さらに，分娩後24時間以内のマターナル・アタッチメントは生後3ヵ月のマターナル・アタッチメントに対して影響力をもつことが示された。

Condon & Dunn（1988）は，115人の妊婦とその夫110人を対象として，妊娠後期の胎児への感情と出産後初めてわが子と対面したときの感情との関連及び夫婦間の違いについて検討した。ここでは，胎児に対する感情と初めてわが子と対面したときの感情について“肯定的である”“親密・情愛のある”の2項目を5段階評定したものが，マターナル・アタッチメント得点として用いられた。その結果，胎児への感情と出産後の対面時の子どもへの感情は有意な相関があることが示された。また，妊娠中の子どものイメージと実際の子どもの印象とが一致しているほど，対面時の子どもに対する感情が高い傾向があった。夫婦間に有意な差は認められなかった。

出産後のマターナル・アタッチメントについて，Mercer（1985）は，242人の初妊婦を対象に生後1ヵ月，生後4ヵ月，生後8ヵ月，生後12ヵ月の計4回にわたる縦断調査を行った。そこでは対象者は10歳代，20歳代，30歳から40歳代と年齢によって分類され，年代ごとに母親役割を達成するプロセスが異なるかについて検討された。母親役割の達成は母親自身の育児における満足感，ぐずついている子どもの扱い方，子どもに対する対応の柔軟性や注意深さ，マターナル・アタッチメントの4点によって評価されている。マターナル・アタッチメントの測定にはLeifer（1977）が作成したFBAが用いられた。結果，マターナル・アタッチメントは，全ての年代において生後4ヵ月が最も強くなり，生後8ヵ月と生後12ヵ月においては変化が認められないという共通した経過を辿ることが示された。

1980年代のまとめ

(a)マターナル・アタッチメントの発達に関する問題　1980年代は，マターナル・アタッチメントをとおして妊娠・出産過程における母親の発達が検討され始めた時期であった。とくに妊娠期のマターナル・アタッチメントが注目され，マターナル・アタッチメントは妊娠の進行に伴い強められること，妊娠期のマターナル・アタッチメントが出産後のマターナル・アタッチメントに影響することが指摘された。さらに，出産後のマターナル・アタッチメントの発達については，回想法ではなく生後1ヵ月から生後12ヵ月という約1年間にわたる縦断研究によって長期的かつ直接的に検討された。しかし，相対的に妊娠期に比べ，出産後のマターナル・アタッチメントを扱った研究は少なく，Mercer（1985）の結果が複数の研究によって検証されることはなかった。

(b)母子関係に関する問題　マターナル・アタッチメントを扱った研究の多くは，マターナル・アタッチメントが母子関係に重要となることを前提としていた。この見解は多くの研究者にとって納得のいくものであり疑われることはなかった。当時の研究者は出産後のマターナル・アタッチメントに対する妊娠期のマターナル・アタッチメントの重要性及び，マターナル・アタッチメントの先行要因について指摘することによって良好な母子関係をより早期から予測できると考えていたのである。しかしながら，マターナル・アタッチメントと母子関係の関連を実証的に示したデータはほとんどなかった。

(c)子どもの発達に関する問題　1980年代のマターナル・アタッチメント研究は，マターナル・アタッチメントがどのように発達するのかについて関心がむけられた時期であった。その中で子どもの発達に及ぼすマターナル・アタッチメントの重要性が検討されることはなかった。

1990年代以降：マターナル・アタッチメント研究の発展

1990年代以降の研究では，マターナル・アタッチメントの先行要因とマターナル・アタッチメントの発達が1つの研究の中で同時に検討された。さらに，1990年代後半には，精神医学の分野において臨床経験に基づき，マターナル・アタッチメントの欠如というネガティブな側面に焦点を当てた研究が実施された。

マターナル・アタッチメントの発達

妊娠期のマターナル・アタッチメントについて，成田・前原（1993）は妊娠期を4期に分類し，275人のべ814のデータを分析した。ここではCranley（1981）のMFASを翻訳した日本語版の尺度が使用された。結果，胎動の自覚を契機としてマターナル・アタッチメントが強くなること，妊娠に対するアンビバレントな感情や否定的な気持ち，夫の妊娠に対する否定的な受け止めがマターナル・アタッチメントを抑える効果があることが報告された。

岡山（2002）は，Cranley（1984）やMüller（1993）の尺度を参考に開発された尺度を使用し，妊娠初期から後期までの妊婦330人を対象として横断的な調査を行った。結果，マターナル・アタッチメント得点は相対的に

初期，中期，後期になるにつれ高くなる傾向があった。また，実母や夫との関係が，マターナル・アタッチメントに対して母親役割の同一化及び妊娠の受容を介して間接的な効果をもつことが示された。

妊娠期と出産後のマターナル・アタッチメントの関連について，Fuller（1990）は，妊婦32人を対象として調査を行った。妊娠期のマターナル・アタッチメントはMFASによって測定され，出産後のマターナル・アタッチメントは授乳場面における母子の身体的な親密さや視線を合わせるなどの行動によって評定された。結果，妊娠期と出産後のマターナル・アタッチメントとの間には有意な正相関が認められた。

Müller（1993, 1994）は，妊娠期のマターナル・アタッチメント尺度（Prenatal Attachment Inventory：以下PAI）と出産後のマターナル・アタッチメント尺度（Maternal Attachment Inventory：以下MAI）を作成した。彼女は228人の妊婦を対象に妊娠後期と生後1ヵ月の2時点において縦断的な調査を行い，妊娠期のマターナル・アタッチメントが生後1ヵ月のマターナル・アタッチメントに対して影響力をもつことを指摘した（Müller, 1996）。しかし，その影響力は比較的小さいことから，生後1ヵ月のマターナル・アタッチメントは妊娠期のマターナル・アタッチメント以外に，実母との関係や出産後の心理状況など母親自身の問題が影響していることが示唆された。

日本でも医学や看護の分野において，妊娠期と出産後のマターナル・アタッチメントとの関連が検討された（大村・山磨・松原，2001；辻野・雄山・乾原・甲村，2000）。その中では文化的，社会的な影響を考慮した日本版のマターナル・アタッチメント尺度が用いられた。例えば，大村他（2001）はMüller（1993, 1994）が作成したPAIとMAIの日本語版を作成し，妊娠後期と生後1ヵ月の2時点における縦断的な調査を実施した。結果，妊娠期と出産後のマターナル・アタッチメントとの間に有意な正相関が認められた。また，彼らは妊娠期のマターナル・アタッチメントの先行要因として母親の内的ワーキングモデルをあげ，安定型，不安定型，回避型の3タイプに分類された母親のマターナル・アタッチメントを比較した。安定型の母親は不安定型及び回避型の母親と比べて妊娠期のマターナル・アタッチメント得点が有意に高く，妊娠期と出産後のマターナル・アタッチメントの相関係数が高いことが示された。

出産後のマターナル・アタッチメントについて，Müller（1994）は，生後1ヵ月，生後4ヵ月，生後8ヵ月の3時点のマターナル・アタッチメントを比較した。1回目の調査は生後1ヵ月において196人の母親を対象として実施された。その後，対象となった母親は2つの群に分けられ一方は生後4ヵ月，もう一方は生後8ヵ月に2回目の調査が実施された。結果，生後1ヵ月と生後4ヵ月，生後1ヵ月と生後8ヵ月の間にマターナル・アタッチメントは比較的強い相関が認められた。3時点のマターナル・アタッチメント得点には有意な差は認められなかった。

Condon & Corkindale（1998）も，自らが作成した出産後のマターナル・アタッチメント尺度を用いて，238人の母親を対象に生後1ヵ月，生後4ヵ月，生後8ヵ月の3時点において縦断的な調査を行った。結果，生後1ヵ月から生後8ヵ月までマターナル・アタッチメントは連続性をもつこと，生後1ヵ月は生後4ヵ月と生後8ヵ月に比べて有意にマターナル・アタッチメント得点が低いことが示された。生後4ヵ月と生後8ヵ月のマターナル・アタッチメント得点の間には有意な差は認められなかった。また彼らはマターナル・アタッチメントと抑うつ，不安，気分，夫婦関係，ソーシャルサポート，子どもの気質との関連についても検討を行った。いずれの要因もマターナル・アタッチメントとの間に相関が認められ，とくに子どもの気質と抑うつの程度がマターナル・アタッチメントに対して強い影響力をもつことが示された。

出産後のマターナル・アタッチメント得点の変化については研究者間で意見が異なっていたが，生後1ヵ月から生後8ヵ月にわたりマターナル・アタッチメントが連続性をもつことについての見解は一致していた。この結果は，出産後のアタッチメントは数量的に変化するのではなく，日々変化する母と子の関わりの中で質的に変化し，その時々にふさわしいマターナル・アタッチメントが連続していることを示唆するものといえる。

マターナル・アタッチメントと抑うつの関連

Brockington（1996　岡野他訳　1999）は，マターナル・アタッチメントの形成困難な状態を“母子関係障害”という用語で説明し，マターナル・アタッチメントのネガティブな側面をとらえた。彼は“母親の苦痛感情の欠如，不安，強迫，焦燥感，敵意，攻撃的な衝動，病的思考，徹底的な拒絶”など具体的な症状をあげ，“これらの動揺した感情，思考，騒動が，回避やネグレクト，暴力的急襲を引き起こす場合がある。臨床的には，それらは複合した症状として現れる”と指摘した。また，Brockington, Oates, George, Turner, Vostanis, Sullivan, Loh, & Murdoch（2001）はマターナル・アタッチメントの欠如が抑うつを複雑にし，長期的な母子関係及び子どもの発達に深刻な影響をもた

らす可能性があり，そのような状態がときに虐待やネグレクトにつながることを指摘した。そして母子関係を良好な方向へと導くためには，母子関係に障害がある母親を早期発見することが必要であると考えた。彼らは独自の尺度（Postpartum Bonding Instrument：以下PBI）を用いて，妊娠経過が正常な母親33人，ハイリスク妊娠の母親22人，母子関係は正常で抑うつである母親21人，母子関係に障害がありかつ抑うつである母親28人の計104人を対象とした調査を実施した。さらに，104人中51人の母親に対してインタビューが実施され，インタビューの内容と質問紙の内容から母子関係障害が診断された。結果，PBIが母子関係に障害をもつ母親の弁別に有効であること，さらに治療を受けることによって母子関係が改善したことが報告された。

Nagata, Nagai, Sobajima, Ando, Nishide, & Honjo（2000）もマターナル・アタッチメントのネガティブな側面に注目し調査を実施した。この調査では生後数日が経過した417人の母親が対象とされた。結果，マタニティーブルーが生後数日間のマターナル・アタッチメントに対して影響力をもつことが指摘された。さらに，1年後の調査では，生後数日のマターナル・アタッチメントが1年後のマターナル・アタッチメントに対して影響力をもつこと，生後1年目の抑うつに対して生後数日のマタニティーブルーや生後1年目のマターナル・アタッチメントが影響力をもつことが明らかにされた（Nagata, Nagai, Sobajima, Ando, & Honjo, 2003）。これらの結果から，母親の精神的健康のために妊娠期におけるマタニティーブルーに対して早期介入が必要となることが示唆された。

Brockington et al.（2001）やNagata et al.（2003）の研究は，マターナル・アタッチメントのネガティブな側面に注目して，母子関係や子どもの発達に対するマターナル・アタッチメントの重要性を示唆したものといえるだろう。

Honjo, Arai, Kaneko, Ujiie, Murase, Sechiyama, Sasaki, Hatagaki, Inagaki, Usui, Miwa, Ishihara, Hashimoto, Nomura, Itakura, & Inoko（2003）は，Brockington et al.（2001）やNagata et al.（2003）の研究を支持しながらも，マターナル・アタッチメントは出産後に突然表れるものではないことから，妊娠期のマターナル・アタッチメントに注目した。彼らはCreanly（1981）とNagata（2000）の尺度を参考に尺度を作成し，妊娠3ヵ月から妊娠6ヵ月までの妊婦216人を対象に調査を実施した。結果，胎動が認識される以前のマターナル・アタッチメントと抑うつとの間に有意な相関は認められなかった。一方，Condon & Corkindale（1997）が行った妊娠後期の妊婦を対象とした調査によると，妊娠期におけるマターナル・アタッチメントと抑うつとは関連があると指摘されている。Condon & Corkindale（1997）の結果と異なる結果が得られた理由としてHonjo et al.（2003）は，対象とした妊婦の妊娠週数が異なることをあげ，妊婦が胎動を感じる前後でマターナル・アタッチメントが変化することを指摘した。

1980年代以降，マターナル・アタッチメントは妊娠経過をとおして，とくに胎動を契機として発達することが多くの研究の中で指摘されてきた（Reading et al., 1984；Condon, 1985；LoBiondo-Wood, 1985；Vito, 1986；Heidrich & Cranley, 1989；Grace, 1989）。妊娠初期のマターナル・アタッチメントが抑うつと関連しなかったというHonjo et al.（2003）の結果は，妊娠期のマターナル・アタッチメントが初期と後期とでは質の異なるものであることを抑うつとの関連から示した新たな知見といえるだろう。

1990年代のまとめ

(a)マターナル・アタッチメントの発達に関する問題　諸外国にやや遅れて日本でも妊娠期から出産後のマターナル・アタッチメントの発達が数量的な分析によって検討されるようになった。1990年代には，マターナル・アタッチメントの発達とその先行要因が同時に検討されることで，マターナル・アタッチメントの発達に影響を及ぼす要因が明らかにされた。また，1980年代に比べて出産後のマターナル・アタッチメントに焦点を当てた研究が多く実施され，そこでは生後1ヵ月から生後8ヵ月にわたるマターナル・アタッチメントの発達が縦断研究によって検討された。

(b)母子関係に関する問題　1990年代後半，ようやくマターナル・アタッチメントと母子関係の関連が実証的に検討されるようになる。しかし，それはマターナル・アタッチメントの欠如と一部の問題行動との関連から，マターナル・アタッチメントと母子関係との関連を指摘したものであった。

(c)子どもの発達に関する問題　臨床的な立場からマターナル・アタッチメントのネガティブな側面と母子関係との関連が検討されるようなると，その中で，マターナル・アタッチメントが子どもの発達に重要となることが示唆される。しかし，今日まで，マターナル・アタッチメントが子どもの発達に及ぼす影響力について実証的に示したデータはほとんどない。

結論

本論文では，1970年代から今日までのマターナル・アタッチメント研究を概観し，年代ごとにマターナル・アタッチメントの発達，母子関係，子どもの発達といった3つの観点に関する問題がどこまで明らかにされてきたか示した。以下にそれぞれの観点に対する今後の課題について述べる。

第1に，マターナル・アタッチメントの発達を扱った研究は，マターナル・アタッチメントをとおして妊娠・出産過程における母親の発達を検討した。そこでは，マターナル・アタッチメントが妊娠経過に伴い変化すること，妊娠期から生後数ヵ月にわたりマターナル・アタッチメントは連続性をもつことが明らかにされた。しかしながら，2点の課題が残された。1点目は，妊娠期と出産後のマターナル・アタッチメントの関連を扱った研究は後期に焦点が当てられ，初期と中期が軽視される傾向があった点である。妊娠期のマターナル・アタッチメントが妊娠経過とともに変化するのであれば，出産後のマターナル・アタッチメントに対してそれぞれの時期のマターナル・アタッチメントがもつ意味も異なるはずである。出産後のマターナル・アタッチメントにとって妊娠期のマターナル・アタッチメントが重要であることを指摘するためには，初期，中期のマターナル・アタッチメントを含め，出産後のマターナル・アタッチメントとの関連が検討される必要がある。

2点目は，出産後のマターナル・アタッチメントを扱った研究は，Mercer (1985) を除いて子どもが1歳を過ぎた時期まで追跡したデータがほとんどないことである。母親は妊娠期から生後数ヵ月という特定の時期に女性から母親へと変化するのではなく，生涯にわたり発達する存在であると考える。マターナル・アタッチメントをとおして母親の発達を検討するのであれば，妊娠期から生後数ヵ月間のマターナル・アタッチメントの発達をとらえるだけでは十分ではない。生後数ヵ月という早期のマターナル・アタッチメントがその後いつ頃まで影響力をもつのかについて検討しなければ母親の発達をとらえることはできないだろう。したがって，乳児期以降，長期的にマターナル・アタッチメントの発達について検討することが今後の課題である。

第2に，従来，マターナル・アタッチメントは母子関係にとって重要となると考えられてきたにもかかわらず，その実態について1980年代まで実証的に示すデータがほとんどなかった点である。近年，マターナル・アタッチメントのネガティブな側面と母親の一部の問題行動との関連が指摘されるようになった (Brockington et al., 2001)。しかし，この指摘はマターナル・アタッチメントが形成されない一部の母親に焦点を当てたものであり，この結果を一般化するには限界がある。マターナル・アタッチメントが母子関係に影響力をもつことを明らかにするためには，ポジティブな側面を含めて検討されることが必要である。

第3に，マターナル・アタッチメントが子どもの発達に及ぼす影響についてである。従来，マターナル・アタッチメントは母子関係に影響力をもつと考えられてきた。一方，子どもの発達を扱った研究では，母子関係が子どもの発達に重要な影響力をもつことが指摘されていた (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。この指摘を考慮すると，マターナル・アタッチメントは母子関係を介して子どもの発達に影響力をもつことが推測される。近年，母子関係障害について検討した研究において，マターナル・アタッチメントの欠如が抑うつを複雑にし，母子関係及び子どもの発達に深刻な影響をもたらす可能性があることが示唆された。しかし，これまでのマターナル・アタッチメント研究においてその実態が検討されることはなかった。マターナル・アタッチメントの発達が母親のみならず子どもの発達にとって重要であることを検討することによって，発達心理学研究におけるマターナル・アタッチメントの有用性を見出すことができるだろう。今後，以上の点がマターナル・アタッチメント研究の中で検討されることが期待される。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation.* Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Brockington, I. F. (1996). *Motherhood and mental health.* Oxford University Press.
（岡野貞治（監訳）(1999). 母性とメンタルヘルス 日本評論社）

Brockington, I. F., Oates, J., George, S., Turner, D., Vostanis, P., Sullivan, M., Loh, C., & Murdoch, C. (2001). A screening questionnaire for mother-infant bonding disorders. Archives of Womens's Mental Health, **3**, 133-140.

Carlsson, S. G., Fagerberg, H., Horneman, G., Hwang, C. P., Larsson, K., Rodholm, M., Schaller, J., Danielsson, B., & Gundewall, C.

(1978). Effects of amount of contact between mother and child on the mother's nursing behavior. *Developmental Psychobiology,* **11**, 143-150.

Carlsson, S. G., Fagerberg, H., Horneman, G., Hwang, C. P., Larsson, K., Rodholm, M., Schaller, J., Danielsson, B., & Gundewall, C. (1979). Effects of various amounts of contact between mother and child on the mother's nursing behavior: A follow-up study. *Infant Behavior and Development,* **2**, 209-214.

Condon, J. T. (1985). The parental-foetal relationship: A comparison of male and female expectant parents. *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology,* **24**, 313-320.

Condon, J. T., & Corkindale, C. J. (1997). The correlates of antenatal attachment in pregnant women. *British Journal of Medical Psychology,* **70**, 359-372.

Condon, J. T., & Corkindale, C. J. (1998). The assessment of parent-to-infant attachment: development of a self-report questionnaire instrument. *Journal of Reproductive & infant Psychology,* **16**, 57-76.

Condon, J. T., & Dunn, D. J. (1988). Nature and determinants of parent-to-infant attachment in the early postnatal period. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry,* **27**, 293-299.

Cranley, M. S. (1981). Development of a tool for the measurement of maternal attachment during pregnancy. *Nursing Research,* **30**, 281-284.

Cranley, M. S. (1984). Social support as a factor in the development of parents' attachment to their unborn. *Birth Defects Original Article Series,* **20**, 99-124.

Cranley, M. S. (1993). The origins of the mother-child relationship: A review. *Physical and Occupational Therapy in Pediatrics,* **12**, 39-51.

Curry, M. A. (1987). Maternal behavior of hospitalized pregnant women. *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology,* **7**, 165-182.

De Chteau, P. & Wiberg, B. (1977). Long-term effect on mother-infant behaviour of extra contact during the first hour post partum. I. *Acta Paediatrica Scandinavica,* **66**, 137-143.

De Chteau, P. & Wiberg, B. (1977). Long-term effect on mother-infant behaviour of extra contact during the first hour post partum. II. *Acta Paediatrica Scandinavica,* **66**, 145-151.

Fuller, J. R. (1990). Early patterns of maternal attachment. *Health Care for Women International,* **11**, 433-446.

Grace, J. T. (1989). Development of maternal-fetal attachment during pregnancy. *Nursing Research,* **38**, 228-232.

Hales, D. J., Lozoff, B., Sosa, R., & Kennell, J. H. (1977). Defining the limits of the maternal sensitive period. *Developmental Medicine and Child Neurology,* **19**, 454-461.

花沢成一・飯塚文子 (1978). SCTに現れた妊産婦の母性意識－母性心理学研究X－ 日本心理学会第42回大会発表論文集, 1080-1081.

Heidrich, S. M., & Cranley, M. S. (1989). Effect of Fetal Movement, ultrasound scans, and amniocentesis on maternal-fetal attachment. *Nursing Research,* **38**, 81-84.

Honjo, S., Arai, S., Kaneko, H., Ujiie, T., Murase, S., Sechiyama, H., Sasaki, Y., Hatagaki, C., Inagaki, E., Usui, M., Miwa, K., Ishihara, M., Hashimoto, O., Nomura, K., Itakura, A., & Inoko, K. (2003). Antenatal depression and maternal-fetal attachment. *Psychopathology,* **36**, 304-311.

川井 尚・庄司順一・恒次欽也・二木 武 (1983). 妊婦と胎児との結びつき－SCT-PKSによる妊娠期の母子関係－ 周産期医学, **13**, 2141-2146.

川井 尚・庄司順一・恒次欽也・二木 武 (1986). 新生児期母子関係の研究(1)－SCT-NKSによる新生児期の母子関係, 及び妊娠期 (PKS) との関連－ 乳児発達研究, **8**, 7-33.

Kennell, J. H., Jerauld, R., Wolfe, H., Chesler, D., Kreger, N. C., McAlpine, W., Steffa, J., & Klaus, M. H. (1974). Maternal behavior one year after early and extended post-partum contact. *Developmental Medicine and Child Neurology,* **16**, 172-179.

Kemp, V. H., & Page, C. K., (1987). Maternal prenatal attachment in normal and high-risk pregnancies. *Journal of Obstetric Gynecolog-*

ic and Neonatal Nursing, **16**, 179-184.

Klaus, M. H., Jerauld, R., Kreger, N. C., McAlpine, W., Steffa, M., & Kennell, J. H. (1972). Maternal attachment: Importance of the first post-partum day. *New England Journal of Medicine,* **286**, 460-463.

Klaus, M. H., & Kennell, J. H. (1976). *Maternal-Infant Bonding.* St. Louis: C. V. Mosby Company.
(竹内 徹・柏木哲夫 (訳) (1979). 母と子のきずな 医学書院)

Klaus, M. H., Kennell, J. H., Plumb, N., & Zuehlke, S. (1970). Human maternal behavior at the first contact with her *young. Pediatric,* **46**, 187-192.

Leifer, M. (1977). Psychological changes accompanying pregnancy and motherhood. *Genetic Psychology Monographs,* **95**, 55-96.

LoBiondo-Wood, G. (1985). The progression of physical symptoms in pregnancy and the development of maternal-fetal attachment. *Dissertation Abstracts International,* **46**, 2625-B.

Mercer, R. T. (1985). The process of maternal role attachment over the first year. *Nursing Research,* **34**, 198-204.

Mercer, R. T., Ferketich, S., May, K., DeJoseph, J., & Sollid,D. (1988). Further exploration of maternal and fetal attachment. *Research in Nursing and Health,* **11**, 83-95.

Müller, M. E. (1993). Development of the prenatal attachment inventory. *Western Journal of Nursing Research,* **15**, 199-215.

Müller, M. E. (1994). A questionnaire to measure mother-to-infant attachment. *Journal of Nursing Measurement,* **2**, 129-141.

Müller, M. E. (1996). Prenatal and postnatal attachment: A modest correlation. *Journal of Obsteric, Genecologic, and Neonatal Nursing,* **25**, 161-166.

Nagata, M., Nagai, Y., Sobajima, H., Ando, T., & Honjo, S. (2003). Depression in the mother and maternal attachment-results from a follow-up study at 1 year postpartum. *Psychopathology,* **36**, 142-151.

Nagata, M., Nagai, Y., Sobajima, H., Ando, T., Nishide, Y., & Honjo, S. (2000). Maternity blues and attachment to children in mothers of full-term normal infants. Acta *Psychiatrica Scandinavia,* **101**, 209-217.

成田　伸・前原澄子 (1993). 母親の胎児への愛着形成に関する研究　日本看護科学会誌, **13**, 1-9.

大村典子・山磨康子・松原まなみ (2001). 周産期における母親の内的ワーキングモデルと胎児および乳児への愛着　日本看護科学会誌, **21**, 71-79.

岡山久代 (2002). 妊婦の胎児への愛着に対する実母ならびに夫との関係の影響　日本看護研究学会雑誌, **25**, 15-25.

Reading, A. E., Cox, D. N., Sledmere, C. M., & Campbell, S. (1984). Psychological changes over the course of pregnancy: A study of attitudes toward the fetus/neonate. *Health Psychology,* **3**, 211-221.

Ringler, H., Kennell, J. H., Jarvella, R., Navojosky, R. J., & Klaus, M. H. (1975). Mother-to-child speech at two years-effects of early postnatal contact. *Journal of Pediatrics,* **86**, 141-144.

Ringler, N., Trause, M. A., Klaus, M. H., & Kennell, J. H. (1978). The effects of extra postpartum contact and maternal speech patterns on children's IQs,speech and language comprehension at five. *Child Development,* **49**, 862-865.

Robson, K. S., & Moss, H. A. (1970). Patterns and determinants of maternal attachment. *The Journal of Pediatrics,* **77**, 976-985.

Rubin, R. (1975). Maternal tasks in pregnancy. *Maternal-Child Nursing Journal,* **4**, 143-153.

高橋恵子 (1976). 母親のわが子に対する愛着の発達 日本心理学会第40回大会発表論文集, 767-768.

辻野順子・雄山真弓・乾原　正・甲村弘子 (2000). 母親の胎児及び新生児への愛着の関連性と愛着に及ぼす要因―知識発見法による分析―　母性衛生, **41**, 326-335.

Vito, K. O. (1986). The development of maternal-fetal attachment and the association of selected variables. *Dissertation Abstracts International,* **47**, 998-B.

Weaver, R. H., & Cranley, M. S. (1983). An exploration of paternal-fetal attachment behavior. *Nursing Research,* **32**, 68-72.

(2006年9月29日　受稿)

ABSTRACT

An Overview of Maternal Attachment Research

Saori SATO

The purpose of this study was to overview maternal attachment researches for the past 35 years in order to study the mothers' development. Mothers' development does not begin with the birth but already exists as the women begin to develop maternal emotion to the fetus during pregnancy. Generally, these emotions in the mothers are called maternal attachment. The understanding of the mother's development during gestation period has advanced with the progress of the research about the development of the maternal attachment. However, three problems in the maternal attachment research, i.e., the problems related with (a)Development of maternal attachment, (b)Mother-infant relationship, and (c)Child development, were found to remain unsolved in this research. Furthermore, this study showed the perspective for the future research to overcome these problems.

Key words: maternal attachment, mother-infant relationship, child development, fetus, infant